

氷の山の甲虫相*

高橋 寿郎

まえがき

氷の山(別名、四箇の山または須賀の山、赤倉の頭、海拔1,510m)は兵庫県と鳥取県の境にあり、兵庫県美方郡美方町(北斜面)、養父郡関宮町(東斜面)、同西谷町(南斜面)と鳥取県八頭郡若桜町(西斜面)とにまたがり、兵庫県下の最高峯として冬季隣接の鉢伏山と共に山岳スキー場として有名であり、兵庫県立自然公園として但馬山岳地区一白山火山列にぞくする休火山、氷の山と支脈からなる氷の山火山群、鉢伏山(1,221m)、瀬川山(1,039m)、扇の山(1,309m)などをふくむ面積約26,900ヘクタールの地域一という名で知られるようになった。

この氷の山の昆虫相については戦前一部の方が採集に行つて調査されたようであるが、何分交通不便のため充分でなく何等まとまった発表がされていない。戦後は交通も便利になり各種施設の完備、地元の誘致等で採集に出掛ける方々も多くなり、その調査結果も相次いで発表されている。甲虫類については中根猛彦博士(1953)、山本義丸氏(1955)、大槻孝司氏(1957)、高橋匡氏(1959)の報文がそれぞれある。

筆者もこの山ならびに付近の甲虫相の調査をおこなってきたが、ここに現在までの結果を発表したいと思う。

この報文には前記諸氏の記録をもふくめさせて頂いたので、かなり結果がまとまったと思う。すなわち記録出来たものは62科、563種に及ぶことは、たとえ7、8月の調査結果で不完全のそしりをうけるかも知れないが機会を見て5、6、9月をも調査するとせば、さらに増加が考えられ筆者の調査がオサムシ、ゴキムシ、ハネカクシ、ゾウムシ等の重要科のものにあまり力をそそがなかった事と未同定の微少種の存することと合せて一つの地域の結果としては上出来と考えられる。今後も機会を得て、さらに調査を続けより完全なものにつとめたいと考えている。

本報文を作製するにあたりハンミョウ、オサムシ、ゴキムシ、ホソクビゴキムシ科の標本は全部大倉正文氏の手許に保管されているので、ご多忙のなかを無理にお願ひして種の同定と目録作製を依頼し、さらに同氏所有の他の氷の山産標本もふくめていただいた。筆者の勝手な

お願いを心よくお聞き頂いた同氏に厚くお礼申上げる。

他の種の同定については、その多くのものを中条道夫博士、久松定成、岸井尚、沢田高平の各氏(ABC順)にそれぞれお願いした。これまた、ご多忙中にもかかわらず同定していただいた上記の方々に厚くお礼申上げる。

筆者自身の同定については出来るだけ正確を期したつもりであるが浅学未熟のため誤りがあるかも知れず、この点ご教示、ご叱正を頂ければ幸いである。

最後に氷の山産甲虫類について採集品のご惠与に預つた石田裕、高橋匡、山本義丸、吉阪道夫の諸氏(ABC順)にもお礼申し上げる。

なお、氷の山産甲虫類563種の目録は作製しているが非常に長くなるので、これの発表は一切省略して兵庫県下産甲虫類のうち注目すべき種を中心に述べ(この場合も和名ある種については学名を省略した)、普通種についてはほとんど言及していない。また筆者の氷の山の甲虫相の調査は次の如く6回実施した。すなわち第1回・1953年8月2、3日、第2回・1955年7月24、25日(石田裕氏と同行)、第3回・1956年7月26~28日、第4回・1957年7月26、27日、第5回・7月20~22日、第6回・1959年7月24、25日。採集案内は奥谷禎一博士(1955)、山本氏(1959)の報文を参照されたい。第2回の採集以後宿泊については福定の西村英夫氏宅にてお世話頂いたここにお礼を申し上げる。

氷の山の甲虫相概説

兵庫県から西へ山口県までの中国地方では古くから伯耆大山が一番昆虫の宝庫と知られ、今でもその名のとおり珍稀なものを産する地として知られているが、この氷の山も伯耆大山にいるものと同じようなものを産する。ただ、この山の交通はかなり便利になったが山が峻しく登山途以外での採集が困難であるのと鬱蒼と繁げている樹木を最近可成り伐採しているので昆虫類も次第に姿を消して行くのではないかと、いささかさびしい気がしないでもないが中国山脈の代表的な山として、さらに兵庫県最大の昆虫の宝庫として扇の山、音水原始林と共に注目すべき地である。

いわゆる寒地性、高地性のものを相当産する反面、南

* 兵庫県甲虫相資料, 21

方系の種もふくみ大変面白い昆虫相をしている。

植物については門外漢で、はっきりしたことがわからないが、一例を柏原高校の故井上三義氏の記録(1959)をとると、ヒメスギラン、オウバシヨリマ、キャラボク、エゾアジサイ、ミヤマキンバイ、ツマトリソウ、オヤマリンドウ、ツバメオト、マイズルソウ、ヤマナレコキ、キノチドリ、コイチョウラン、フタバラン等数多くの県下でのこの地のみの記録種がある。

昆虫類では、未だ完全に調べられていながその中比較的わかっているものは蝶類99種(吉阪道雄、1955、山本広一、中尾淳三、1959)、蛾類18科、464種(山本義丸、1955~1959)がある。甲虫類は筆者が6年間調査して現在62科、563種が記録出来た。

この山の登山は関宮町円戸までバスが八鹿より出ており鹿倉口から円戸までは歩いてはあまり面白いものがないから村岡行に乗って鹿倉口で降りるより円戸まで行く方が便利である。円戸からすぐに福定の部落に着く、福定の部落をはずれると道が2つに分れ、右側は大久保の部落ならびに鉢伏山に向い、左側の広い途を入ると、しばらくはトラックの入る大きな途で奥の方からケーブルで搬出する材木の置場があちこちにある。次第に途は狭くなり谷の間を歩いて溪流を横切って山道にかかるとひどく急峻な登りが続き、地元で「アズキころがし」と称する難所がある。これを登りつめてやや開けた所に地藏堂がある(大体標高850m)。ここから氷の山越(標高1,252m)までは近年かなり途を拡げている。氷の山越から山頂までは尾根道で美しいブナ林が続いている。山頂へ登るのは、このほか鳥取県の若桜から氷の山越に登る途と南側役から横行を経て山頂へ至る途もある。

福定、大久保部落を中心として鉢伏山、氷の山山麓一帯、それから氷の山越までの間が昆虫類のよい産地であり、氷の山越から山頂まではそうよいとも思われない。他の地帯は未調査なのでくわしくわからない。

福定、大久保の両部落付近にはミヤマカラスアゲハ、アオバセセリが多く、鉢伏山麓にはウスイロヒョウモンモドキ、ヒョウモンモドキがおり、地藏堂前方の広場にはヒョウモン類が多い。氷の山越付近は鳥取県側から吹き上げてくる風に乗ってシジミチョウ類が多い。氷の山越に至るまでウスイロオナガシジミ、ウラクロシジミ、エゾミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ、フジミドリシジミなどが得られている。

山を登りながら耳にするギャー、ギャーという声は蟬の声でエゾハルゼミ、アカエゾゼミがいる。勿論これ等の蟬は県下の他の地にもいるが、この地では比較的多くいるようである。氷の山越から山頂までヒメキマダラヒカゲが多い。氷の山頂上でカバマダラがとれた記録があ

るが、南方系の蝶が山頂でとれていることは特筆すべきである。

蛾の仲間については山本義丸氏が詳しく記録されているので省略するが、わが国より初めて記録されたネジロシマケンモン、北海道以外の地で初めての記録ウスムラサキケンモン等の珍品がある。狩猟蜂にはオオドロバチモドキ、ヤマトドロバチモドキといった珍種が知られている。奥谷博士はハバチ類を記録しておられる。氷の山を学名にとりいれたブナハバチもいる。また永富昭氏はシギアブ科で新種を可成り記録されている。

さて甲虫類であるが氷の山の甲虫で一番初めに文献に現われたのは岩本新一氏のセスジュリハムシ(ルイスクビナガハムシ)であろうと思われる。即ち小幡氏が1937年8月7日に採集された記録がある(昆虫研究, N, 1/2, 1940)、戦前の記録ではこれを知るのみで、戦後になって初めて中根猛彦博士により発表された(1953)、その後柏原高校生物研究会ならびに兵庫農大により調査が始められ高橋匡氏による甲虫相の目録が発表されるにいたった(1959)。

特産種というのはいないようであるが珍種は可成り産す。比較的まとまったグループを中心にその概要を述べてみる。近畿以西、四国の山地を除いて珍しい種の一つであるルリボシカミキリがこの地には産する。美しい青色に黒い紋をもちカエデ、コブシ、ブナノキ、タルミ類、ヤナギ類の樹幹、伏採木に穿孔するといわれているが、この地では日光の直射する積木の上などに見かける。勿論個体数は多くない。県下では隣接の扇の山、宍粟郡音水原始林の3カ所が産地として知られている。海洋気候性の種として沿岸諸島嶼の多くから記録され本土の内陸奥深くには見られず、主として海岸沿いに分布し目下の北限は飛鳥(山形県)といわれるフタオビミドリカミキリが多いのも注目してよい。この種も音水原始林と共に県下では他の地にはほとんどいない(摩耶山の記録がある)。

古くからアサカミキリの多産地として注目されてきたが近年麻の栽培が少なくなってきたので個体数が減少してきた。この種は他に雪彦山にも産する。電灯に飛来した白色に小黒紋を有するシロカミキリも珍品である。

ハナカミキリ類の種類も県下でこれ程産する所はない。地藏堂から上氷の山越に至るまでの道端の花を注意すると、いろいろのハナカミキリがきている。県下でこの地からのみ知られているハナカミキリはヨコモソハナカミキリ、ナカバヒメハナカミキリ、ミヤマクロハナカミキリ、ホクチチビハナカミキリ(この種の産は疑問)、ヤツボシハナカミキリ、ニヨウホソハナカミキリ、ホソハナカミキリ等があり、ハナリキカミ類だけで30種ぐらいが知られている。

カミキリムシ科の内では県下でこの地のみ知られているホソトラカミキリ、ドイカミキリ、クモノスモンサビカミキリ、クロオビトグムネカミキリ、チビコブカミカリ、クロニセリソゴカミキリ等がある。

山麓大久保部落付近の薪にはトラフカミキリを多く見かけ、花を注意すると赤くて美しいクスベニカミキリやオオヨスジハナカミキリを可成り見受け、ヨスジハナカミキリは大変多い。

氷の山に登る途中に積んである薪は絶好のカミキリムシ類の採集場所で、産卵に集まる彼等の種は多い。一番驚くほど多くいるのがキイロトラカミキリ、ミドリカミキリであり、個体数は少ないがニイジマトラカミキリ、ウスイロトラカミキリ、キスジトラカミキリもきている。稀にミヤマコブヤハズカミキリ、ツチイロコブヤハズカミキリがいる。

川に沿った樹にイタヤカミキリ、ゴマダラカミキリが多い。美しいキモンカミキリ、ハンノアオカミキリがブナの朽木にきている。カミキリムシ科はいくらか同定に疑問の種もあるが92種がこの地区より記録出来た。

歩行虫類は石起しを全然やらなかったので記録出来た種は大変少なかったが(27種)、本州では中部地方以東の山地から得られ、近畿地区以西では大山(鳥取県)、稲村岳(奈良県)のみに産すると知られていたクロズジュウジアトキリゴミムシおよび本州から初めて記録出来たチュウジョウアオアトキリゴミムシ(大倉、昆虫学評論、1962)の珍品が共に叩網でえられた。

クワガタムシ科ではヒメオオクワガタ、ルリクワガタ、オニクワガタ、マダラクワガタを産する。ルリクワガタは地藏堂付近の朽木に來ていたものを奥谷博士が採集されたもので、小形ではあるが青藍色の美しい種である。オニクワガタはブナの朽木より採集されている。ヒメオオクワガタは隣接扇の山には可成り多く産することが知られているが、日本全般的に眺めても珍しい種の1つであろう。マダラクワガタは県下でこの地のみから知られている。大体北日本には多く、南日本には少ない(県下でも同様中央部から南には少ない)アカアシクワガタが多くおり登山道の途中の溪流に面したヤナギに交尾中のものもふくめ僅か30分ぐらゐの間に40数頭採集出来たのにはいささか驚いた。この地区でのクワガタムシ科の記録は9種である。

コガネムシ科にも県下からこの地のみから記録されている種がある。即ちチュウカイマグソコガネ(鳥海山産の1♂により新種として発表されたものであるが、氷の山からの記録が中根博士によりされている。1953)、アオウスチャコガネは伯耆大山には可成りいることが知られているが、県下ではこの地のみである。ホソヒゲナガビロウドコガネ、クロテンビロウドコガネ、アイキョウ

チャイロコガネ、イマダテチャイロコガネ、キラチャイロコガネ、カラフトチャイロコガネ等はこの地のみに産し、トラハナムグリは奥谷博士により記録され、他に安栗郡音水にもいるが稀種である。オオヒラタハナムグリは小形であるが珍しい種で、県下でこの地の他に扇の山、音水に産する。小形でも黄色の美しいラインアシナガコガネは極めて多く、トゲヒラタハナムグリ、ツヤスジコガネ、オオトラフコガネ等比較的県下産個体数の少ないものを産する。コガネムシ科は全部で60種記録されているから県下産125種の約半分がこの地区にいる事になる。

タマムシ科では美しいミヤマナカボソタマムシを産する。隣接の扇の山には多いとの事であるが一、ルイスチビタマムシは小形美麗珍品で奥谷博士の記録(1955)があるが、県下では此処のみであろう。タマムシ科は8種が記録されている。

コメツキムシ科は20種であるがベニコメツキのような美しい種、関西地方では稀種に属するカタアカホソコメツキを産する。

西谷側は山本義丸氏によるとヒメボタルが多いとのこと、ホタル科は7種を産す。

ベニボタル科は10種記録されているが、その中には大林氏が新種として発表された *Cladophorus incompositus Ohbayashi* (Mushi, X X V, 6, p.21, 1954) が中根博士により当地より採集されている(1♂, 30—VII—1952)。

ケンクスイ科(6種)からも中根・久松両氏発表の新種 *Cyllodes punctidorsum Nakane et Hisamatsu* (Akitu, IV, 3, pp.55—56, 1955) がこの地にいる(1♀, 18—VII—1940, Kurosa leg.)。

シバンムシ科には本邦で初めての記録らしきものが採集出来た(久松氏同定)。

いたる所にある薪の山、朽木にはオオキノコムシ(5種)、ケンクスイ(6種)、ゴミムシダマシ(17種)、デオキノコムシ(10種)、ヒゲナガゾウムシ(10種)、カミキリムシ類が多く集り、中には珍しい種もいる。デオキノコムシ、ヒメマキムシ科から共に日本産で該当種のないものがえられている。花にはハナカミキリムシ以外にハナノミ(9種)、オオハナノミ(1種)、カミキリモドキ(10種)が多く、分布の西限がこの地であると考えられるクロツヤヒゲナガハナノミがいる。テントウムシ(16種)、ハムシ(99種)は一般には小形なものであるが、中にはワモンモモトハムシ、セスジュリハムシ、ヒシバクビボソハムシ等珍品の姿にも接せられ、ムネアカサルハムシも県下でこの地のみいる。その他ゾウムシ(26種)、オトシブミ(21種)にも面白いものがあり、氷の山越から頂上に至る途中でムツモンミツギリゾウムシ

がとれている。電灯に飛来したセスジゲンゴロウ（ゲンゴロウ類5種）、中部地帯から主として知られていたヒメモンシデムシ（シデムシ類4種も産）する。

まとめ

以上で氷の山の甲虫類の概説を終る。県下の甲虫類は目下のところ未調査地が多く、まだまとめる段階に程遠いが現在の知見で眺めて見るに、この地域の甲虫相は氷の山の標高1,510.1mというあまり高くない山でありながら、日本での中部以北の高山ないし亜高山地帯に分布している植物ならびに昆虫を分布している反面、思いもかけない南方種をも産し、新種発見の可能性もあり、隣接の扇の山とさらに宍粟郡水原原始林ともよく似た甲虫相を呈し（扇の山については近年兵庫農大生物研究部および柏原高校生研により調査が行なわれ、その結果も逐次発表されており、氷の山に産しない種も可成り多いようであるが大体氷の山の甲虫相と相似している）、伯耆大山ほど種類、個体数にめぐまれていなくとも同じようなものを産する点共に中国山脈系の代表的産地であることがわかる。そういう意味では昆虫の宝庫と称してもあえて過言でないと思う。ただこのように珍しい昆虫の棲家が次第に樹木の伐採で減少して行くことと、このような紹介文に刺戟された採集家の乱獲による昆虫相の乱れを厳に慎しみ、かかる立派な産地が出来るだけ残るようになりたいものだと思う。

氷の山の昆虫に関する参考文献

- 1 岩田久二雄・奥谷禎一・永富 昭・中根猛彦；氷の山の昆虫，兵庫生物，Ⅱ，3，pp.121~125 (1953)
- 2 山本広一；兵庫県氷の山夏の蝶 虫同好会研究報告，No.1，pp.49~54 (1955)
- 3 山本広一；但馬・氷の山夏の蝶

- 兵庫生物，Ⅲ，1/2，pp.22~26 (1955)
- 4 吉阪道雄；氷の山の蝶類 兵庫生物，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，1/2，pp.27~29，Ⅲ，3，pp.124~125(1955~6)
- 5 山本義丸；氷の山の蛾類について 第1，2，3報，補遺兵庫生物，Ⅲ，1/2，pp.3~6 (1955)，Ⅲ，3，pp.121~123 (1956)，Ⅲ，4，pp.237~239 (1958)，Ⅲ，5，pp.383~384 (1959)
- 6 山本義丸；氷の山の昆虫 柏原高校生物研究会々誌 *Natura*，No.11，pp.7~9 (1955)
- 7 奥谷禎一；但馬の好採集地 新昆虫，Ⅷ，5，pp.16~20 (1955)
- 8 大槻孝司；氷の山の採集記，氷の山妙見山の昆虫 *Natura*，No.14，pp.38~45 (1957)
- 9 安達鉄美；氷の山採集記 *Natura*，No.15，pp.12~17 (1958)
- 10 氷の山調査団；氷の山の昆虫及び植物 *Natura*，No.15，pp.17~19 (1958)
- 11 西村 登；氷の山溪谷の水生昆虫 兵庫生物，Ⅲ，5，pp.239~241 (1959)
- 12 中尾淳三；氷の山付近の蝶相 *Natura*，No.16，pp.15~23 (1959)
- 13 山本義丸；氷の山蛾相 *Natura*，No.16，pp.23~28 (1959)
- 14 高橋 匡；氷の山の甲虫 *Natura*，No.16，pp.28~42 (1959)
- 15 広瀬邦久，大久保順夫；氷の山採集記 *Natura*，No.16，pp.50~54 (1959)
- 16 山本義丸；氷の山とその蛾相 蛾類同志会通信，No.16/17，pp.148~150 (1959)
- 17 安本五夫，奥谷禎一，中国山脈の雄氷の山 兵庫の自然（単行本），pp.133~135 (1960)

(31—Ⅲ—1965)

森博士生物奨励金受領者推薦の件

ご承知の通り毎年、1月下旬に受領者の詮衡会議を理事会で決定いたします。会員のご推薦方をお願いいたします。

先ず推薦者の略歴、行績、その他、研究者にプラスになることをお書き添えのうえ、各支部の理事、または会長（西宮市神呪町8・紅谷進二）あて早目にお送り下さいますようお願いいたします。ただし、受賞者、推薦者とも会員に限られています。

(室井 紳)